究に適用されたことは大なる功績といはねばならぬ。多くの祭儀の中で氏が特に重視されるのは季節祭である。本書に收められた外者欺待傳說考、豐玉姬傳說の一考察、笑ひの祭儀と神話、スサノヲノ命及び出雲の神々、我國天地開闢神話に對する一管見、蛭兒と日女、日の神の子孫の七篇はいづれもその立場に於て取扱はれ輝かしい成功を見せてゐる。そして氏の關心せらるゝ他の點はいはゞ日本神話の屬する文化系統でありその意味に於て南方大平洋神話との比較に一の重心が置かれてゐることも見逃すことは出來ない。これらの諸考察に當り氏は屢〻他の示唆を得たことを述べてゐられるがたとへそうであつたとしても氏の努力によつて百尺竿頭一歩を進められたものが多く近來の好著たるを失はない。新しき日本神話學に對する最も適當なる教科書としてこの學問に興味を有せらるゝ諸君の一讀を薦むる所以である。(四六版本文二七四頁索引二四頁、定價貳圓、東京、同文館發行)

〔肥後〕

●北畠親房　中村直勝著

嚮に『日本文化史南北朝時代』、『南朝の研究』の二篇を著はして、此の時代の錯雜極りなき時勢粧の由來する所に就いて明快なる所論を立てた著者は、最近當代の政治信仰思索考證の上に千古に消えない足跡は印した北畠親房に關して一書を草してこれに世に問はれるに至つた。

本書は著者が序文に云へる如く、別格官幣社阿部野神社の請に應じて述べられたものであり。同社の祭神たる北畠親房顯家父子の功績を、一般人士に明確に且容易に理解せしめて、五十年前この神社が創建されるに至つた動機を明らかにする目的に從つたものであるから、極めて平易に叙述されてゐるが論述されてゐる中には興味深い問題が含まれてゐる。

嘗つて史界に文化史研究が盛んになり歴史研究の對象が政治の實績の批判より人間精神の文化建設の後付けに變り、斯界の領域が一般民庶の生活に迄及ぼされるやうになつた頃から、偉人と時代との關係が盛んに論ぜられ

る樣になつてきた。就中歷史の形態の一つである傳記がこの論爭に就いて最も多く動かされて、一時は時代が優位を占めて偉人が抹殺されるに至つて傳記編纂亦無意味なものになつた事もあつたが、近時は歷史的社會的なるものゝ實在を主張すると共に、之を實踐に移すものとしての偉人の意義をも認識される樣になつて來て、個人の傳記編纂の究極の意義が認められるに到つた。而して本書は三篇より成り、後醍醐天皇北畠親房北畠顯家に別れてゐるが、本編として論ぜられる親房の功績よりも辯編として說かれてゐる後醍醐天皇の御理想の方に、著者が歷史的意義を付してゐる點に先の問題に付いて注意の深さが思はれる。公家一統政治の實現の理想の爲に何物にも屈せられなかつた天皇の信念が遂には新しい時代を生んだものであり、親房はその翼贊者として常に天皇を助け奉り一面現實に卽する事を忘れなかつたものであると說かれてゐる點に本書論述の重點があると考へてこの點を明らかにする事によつて更に過渡期としての南北朝時代が更に深く理解されるものがあると信ずる。（菊版四二二頁、京都星野書店發行、定價金參圓）〔赤松〕

●史蹟調査報告　第五、第六輯

文部省宗教局編

史蹟名勝天然記念物保存法の施行以來、史蹟として指定されてゐるもの約二百個所に達してゐる。大正十五年以降其局では指定に必要な調査を主とした題目の報告と別に學術的調査を主とした精査報告を刊行して逐次この記念すべき史蹟の國家的臺帳を作成しつゝある。今、題記の第五輯には昭和四年度に指定を受けた千葉、愛知、山梨、岐阜、岡山、山口各縣下のうち十ヶ所を、其の第六輯には次年度指定の京都、神奈川、千葉、三重、福島岐阜、長野、福井、石川、富山、岡山、山口縣の十七ヶ所を記錄する。一々の史蹟の目次を擧ぐることは省略するが、此種の報告は各縣の史蹟調査報告を容易に入手し難い者にとつて便益を受く處が多い。此機に際し全般に亙る指定史蹟を要約した一覽表的なものゝ刊行を望むものである。